

全国大学造形美術教育教員養成協議会メールマガジン 2024.7.1 第 82 号(毎月 1 日発行)

美術を通じた国際交流の意義～ドイツ・ブレーメン滞在



浜松学院大学 筧 有子



ブレーメンの芸術センター正面 旧タバコ産業地区の一角にある

1. 静岡ブレーメン国際交流「ENcounter エンカウンター 2024 / IV」概要

この文章を書いている今は、ドイツ・ブレーメンに滞在している最中である。



ブレーメンの旧市庁舎前にある音楽隊の像

今回は、静岡県にゆかりのあるアーティスト 6 名がブレーメン市の文化芸術課の招聘を受けてドイツ側のアーティストと滞在交流イベント及び展覧会を行う 3 週間のプログラムを行っており、本日は滞在 14 日目で、21 日の滞在の 3 分の 2 が終了したことになる。2023 年にドイツ側の芸術家 4 名を招待し静岡県藤枝市にて国際交流を行った上で、2024 年は日本側がブレーメンを尋ねるプログラムとなっている。このプロジェクトは 2011 年から 2012 年にも行われ、当時は日本側のドイツブレーメン滞在は行われたが、東日本大震災のためド

イツ側の日本滞在が実現しなかった。コロナ禍のプロジェクト停止期間を経て、12 年後に第 2 回目の交流が実現し、今回はドイツ側、日本側の両方の滞在が実現した。

2. ブレーメン市とタバコ産業の歴史的背景

ブレーメン市の人口は約 56 万人、北ドイツではハンブルクに次いで第 2 番目に大きな街である。歴史的にはハンブルク、リューベックとともに中世からハンザ同盟を結んだ貿易都市として有名で、中世の繁栄については日本でもよく知られている。今回我々が知ったブレーメンの歴史の一側面として、タ



タバコ製作者を表現した群像彫刻の記念碑 Holger Voihts 1983 年

タバコ産業の発展がある。1850年頃にはブレーメン市民の6人に1人はタバコ産業との関わりにより日々の糧を得ていたと言われている。タバコ製作の労働者は、家内産業的に小さな工房の中で1日に約1000本のタバコを製作し、12~14時間働かねばならなかった。筆者がワークショップを行った幼稚園があったのは、過去にそのようなタバコを作る小さな工房が数多く立ち並んでいた歴史的な地区であり、広場には記念碑が置かれている¹。ワークショップのコーディネーターは、タバコの製作に従事する人々が、厳しい労働の中で製作したタバコ数本を靴下の内部に隠して日々こっそりと持ち帰ったため足がヤニで黄色くなっている様子を示して、この地区は別名「黄色い足の地区」と呼ばれていたことを教えてくれた。

また、我々の展覧会会場となるブレーメン芸術センター²は、生産して集められた数多くのタバコを取引まで保管する倉庫の跡地を利用したものである。何棟にも分かれて非常に大きく、事務所、医療機関、保育園、ロッククライミングやエアロビクスなどの練習場などと共に、芸術センターは入っている。非常に広い建物で芸術センターの内部には2つの劇場と多くの個人用アトリエとグループ用アトリエがある。芸術センターをたばこ産業の倉庫跡地に置くことで過去のタバコ産業に対するネガティブなイメージを刷新するような効果を期待していることについて批判的な立場の考えもあるようだ。確かにブレーメンの市街地を歩いていると、タバコを吸いながら歩く人々が多くいる。このタバコ倉庫跡にアトリエを借りられた芸術家達は、自分の制作のために良い機会である反面、イメージ戦略に利用されているという複雑な思いを持っている人もいるとのことであった。

ブレーメン市内には、現在少なくとも5つの芸術家の集合アトリエがあるとのことであった。我々がこの



ブレーメンの芸術センター中庭

プログラムで関わりがあったのはその内の3つで、展覧会会場となった前述の①ブレーメン芸術センター「Zentrum für Kunst」が一番新しく、設立から1年半と聞く。一方、宿泊施設となった②芸術家の家³「Künstlerhaus Bremen」は1992年から活動し、ブレーメン現代美術館ヴェーザーブルクの近くにある建物で、15人ほどのブレーメン在住アーティストのためのアトリエ、ギャラリーのほか、最上階にゲスト用のアトリエ兼宿泊設備を持っている。2012年にも静岡側アーティストの宿泊施設となった。なお、日独芸術家の交流会の会場となったのは、③ブレーメン中央駅裏の旧貨物倉庫⁴「der Güterbahnhof Bremen - Areal für Kunst und Kultur」で、ここは1997年に立ち上がり、現在300人以上の芸術家がアトリエとして使っている。この場所の各アトリエはさまざまなスタイルで、快適な暖房や台所などがある空間のほか、空調の設備はなく倉庫を自ら改装して使用している場所もあり、借りている芸術家達自らが、非営利ギャラリーの運営、アトリエ前の園芸整備、清掃作業、はちみつの生産販売なども行なっている。ブレーメン市内には、このようなさまざまなアーティストを支援する施設があるが、それでもまだアトリエを探しているアーティストが多いのだと聞く。ちなみに①の旧タバコ倉庫は3年間、②の芸術家の家は最大で7年間借りられ、③の旧貨物倉庫は1度契約したら期限はないそうだ。空きが出た時点で募集があり、それぞれ運営の担当者が新しいアトリエ使用者についてポートフォリオなどをもとに選抜を行う。



ワークショップを実践した幼稚園が入る建物

3. 幼稚園でのワークショップ

今回のプロジェクトでは、交流会の参加、アトリエでの制作および展覧会への出品とともにワークショップの実践が条件となった。筆者は保育者養成校に勤務する者としてドイツの保育現場との関わりを持ちたいと思い、幼稚園でのワ

ワークショップを希望した。内容は、粉状で簡単に色を持ち運べて日本の和紙を使用する折染の実践を提案した。2024年6月19日のワークショップに参加した園児は約25人で、年少から年長の園児に対して3つのグループに分かれてもらい、順番に一グループにつき30分程度の実践を行った。紙を折る作業については、当初は難しい様子であったが、最初のグループの様子を見た幼稚園教諭からの丁寧かつ簡潔な適切な指導があり、次のグループではスムーズに進行した。自由な折り方をしてもらうこともできると提案してみたが、ドイツ側からは規則的に折ることで模様が出る折染の特徴を理解することや紙を丁寧に折ることの練習としても良いので、まずは規則的に折る技法を実践してはどうかと提案があって、そのように行った。4歳と6歳の園児が同室で過ごしていることから縦割り保育が行われている様子で、それぞれのグループには、「ヒトデ」「タコ」などの海洋生物の名前がつけられていた。この実践の詳細なレポートは次の機会に譲ることとするが、ドイツ側の関係者からの反応として、誰もが楽しんで簡単に色に関われ、かつ綺麗な模様を作ることができるこの技法に感動したということで、参加した子ども達・教員・ドイツ側アーティストが満足してくれた様子があった。モダンテクニックをはじめとする「絵画技法の技術力に関わらず、楽しくある一定の造形的な結果を得られる」ことに価値を置いた日本の造形教育の意義を確認できたように思う。なお、実践には実習中のドイツ人学生も同席した。ドイツでの幼稚園教諭(児童教育士)養成課程は3年間、2年の座学の後に1年の実習を行うか、週3日の座学と週2日の実習を組み合わせる3年間行うとのことであった。今回出会った実習生は、日本人留学生から見せてもらった紙芝居はここでは販売していないので個人的に作って

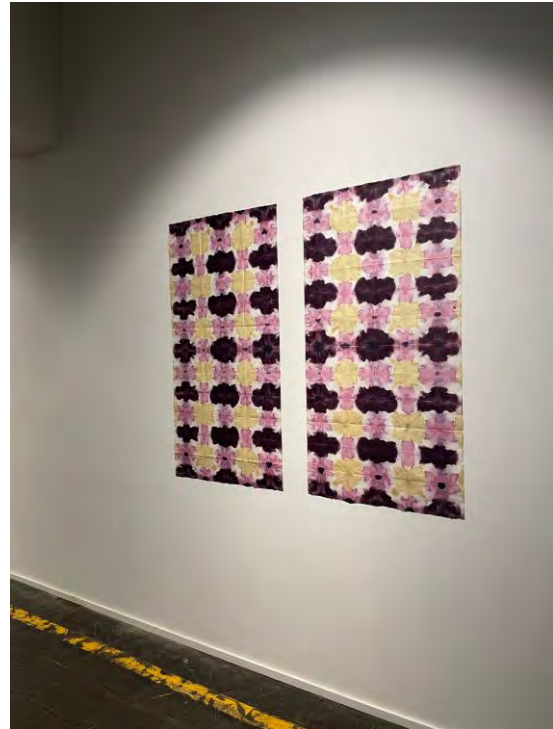


ブレーメン芸術センター アトリエでの制作風景

保育に取り入れていることを教えてくれた。

4. 滞在制作と国際交流展の意義

制作を行うアトリエでは、十分な広さはもちろん、展示技術スタッフ3名、清掃員1名、台所を取り仕切る人が常駐し、必要な作業について手を貸してくれる非常に恵まれた環境だった。現在は本プロジェクトのメインイベントである滞在制作も佳境で、今回筆者は現地で入手したインクと日本から持ち込んだ染料を使用した作品を制作している。滞在制作の成果としての展覧会は、この週末に実施される⁵。搬入は1週間で、展示開始に向け努力を重ねる日々である。作業中には、多くのドイツ側の関係者が和紙と染料を使用する筆者の作品に関心を寄せてくれた。



日本から持参した著者の作品 dyeing paper 2022

これまでの滞在期間の中で印象的だったのは、日本人アーティストに対する敬意である。歓迎パーティから始まって、各自の作品の特徴に合わせて展示場所を提供してくれたのはもちろん、それぞれの意向に沿った搬入を行うよう丁寧に話し合いを重ねてくれた。コンセプトについても聞き取りを行い、来場者からの質問に備えて監視員に伝えてくれるという。これについては、会場はもちろん、本プロジェクトの受け入れ側となったドイツ人アーティスト達の尽力によるものが大きかった。昨年での日本での展覧会を経験して、日本人の気質や現代に活動する日本アーティスト個人に対する理解を深めてくれたことも一助となっていたように思う。また、展覧会実現までに必要なさまざまなミッションを通して、国際的なプロジェクトで展覧会を作り上げていく過程で共に活動し、その人となりや生き様、アートに向かう姿勢、作品を組み立てる方法や材料の使い方など、ドイツ側、日本側の各個人のことを知る機会となって、さまざまな交流が生

まれた。これはグループ同士での国際交流の醍醐味でもあると思う。

5. 美術教育への還元

著者は25歳から32歳まで北ドイツに在住し、この地域には第二の故郷のような思い入れがある。約10年ぶりの滞在に懐かしさもひとしおであった。しかし日本画出身であることから、その滞在時に自分の制作は日本人としてどのようなべきかという課題に向き合うことになり、現在までそれは続いている。和紙、日本画用の絹、染料などが近年の制作材料であるが、今回はドイツについてから入手した染料を混ぜて使用したり、静岡からお茶を輸出するときに使用された歴史を持つ「茶箱」を基底材にしてコラーージュを施した作品など、国際交流を象徴する作品を制作でき、新たな成果となった。

制作活動の基本は、「作りたい」「見せたい」「作品を通して社会への問題提起をしたい」など内なる動機が基本だ。芸術制作については、最初から完成までを作り上げていく粘り強い力が必要である。作って展示するという基本が成立していれば、そのアーティスト自身の達成できる方法で実現すれば良い。見せ方、活



滞在中に制作した作品 tea transport box 2024

動スタイル、スケジュール管理などそれぞれ十人十色だ。その場合は、他人の視点を必要以上に気にしすぎずにまず一定の結果が出るまでは自分自身の選択に自信を持って進めていくことが大事であると思う。芸術制作とは、豊かな表現のために自分を磨き続ける中で、さまざまな必要な活動や作業を主体的に行い、最後まで自らに責任を持つことである。感動できる美に出会うことが人々を成長させ、それが生きる力になっていく。美術を通じた教育も、共通している部分があるのではないだろうか。アーティストは芸術制作に特化したプロフェッショナルであるべきで、美術教育研究者は美術教育

について専門的に研究を行う、それぞれが生涯をかけてそれに取り組むべきという考え方もあるだろう。両方を行うには人生は短すぎるとも思える。ただ、著者は教員として美術教育の分野に職を得てからも引き続き制作活動を行い、制作と教育の両輪に足を置いてきた。その二つが矛盾しているとは思わない。制作者の視点が、美術教育に新しい風を送ることもあるのではないかと思う。

美術教育では、子どもたち一人ひとりが「一斉に」「同じ時間で」「同じものを」「同じ材料で」作ることが前提とされる現状があるが、その必要があるのだろうか。学習指導要領にもそのようにしなければならないと書いていないように思える。なぜ図画工作や美術ではそのようになるのだろうか。集団生活を学ぶという他の目的が入り込んでいるのだろうか。公平に評価をつけるためか。人員配置の問題、1人の教員が全ての子どもたちの活動を指導しなければならない効率性の視点からか。あるいはその全てが関係しているのかもしれない。豊かな学びのための多様性の許容が深まり、それが保障される現場になったら良いと願う。教育活動では、教員はその題材や制作の条件を提供する立場にあるから、目の前にいる子ども達にとってその活動が新鮮で魅力的な刺激となっているかを常に見極めなければならない。現実的には、時間的な制約、教室の備品や教材、教材費も条件が厳しい。実現可能性という意味で、この発想は夢のようなことなのかもしれない。それでもなお、現実の枠の中で豊かな創造性を育むものを提供していきけるよう、保育者及び教員養成の立場からできることについて、ささやかでも努力を怠らないでいたいと思う。

最後に、勤務先では造形表現及び図画工作とその指導法の科目を担当している著者であるが、今回アーティストとしての活動を中心に行う本プロジェクトに送り出してくれた勤務先、及び本プロジェクト参加に際し多大な協力を行ってくれた関係者各位に感謝する。

註

1 タバコ産業に従事する労働者の状況については、ブレーメン市内の Kirchweg に建てられた Holger Voihts 氏のタバコ生産者記念碑「Zigarrenmacherdenkmal」(1983) に刻まれた文章を参考に構成した。

2 ブレーメン芸術センター Zentrum für Kunst

<https://zentrum-fuer-kunst.de/wegbeschreibung/> 2024/06/19 最終アクセス

3 ブレーメン芸術家の家 Künstlerhaus Bremen

<https://www.museeninbremen.de/kuenstlerhaus-bremen/> 2024/06/19 最終アクセス

4 ブレーメン中央駅貨物倉庫—芸術と文化の地区「der Güterbahnhof Bremen - Areal für Kunst und Kultur」 <https://gb-bremen.de> 2024/06/19 最終アクセス

5 本プロジェクトの成果発表展覧会については、ブレーメン芸術センターのイベントの一部として行われる。プログラムについては、https://zentrum-fuer-kunst.de/wp-content/uploads/2024/06/Programmuebersicht-Saisonfinale_Zentrum-fuer-Kunst.pdf に記載されている。 2024/06/19 最終アクセス